四月――

桜の季節。新年度。人によっては環境が変わり新生活が始まる。

俺はと言えば高等部の二年生から三年生に進級するだけなので、特に何の感慨もない。

……というか、この時期になると毎年、妙な違和感というか、同じ時間を繰り返しているような既視感（デジャブ）を覚えるのだが、それについては触（ふ）れない方がいいと魂的（ゴースト）な何かが囁（ささや）くので触れない。

世の中には知らなくていい事があるのだ。

真実から目を背（そむ）けるのが愚（おろ）か者の所業だというなら、俺は愚か者で構わない。

それより問題は妹のカナコだ。彼女は四月から高等部の一年生になる。

そう、つまり――妹が後輩になるのだ。

12 戦目

『妹か、後輩か』

俺の名前は橘（たちばな）アサト。ゾイエス学園高等部の三年生（もうすぐ）だ。

今日はエイプリルフールという、人によって温度差が激しい、やや微妙な感のある日でもある四月一日。

多くの学生は春休みという短い連休を謳歌し、進学を控（ひか）えた新入生にとっては期待と不安で、そわそわと落ち着かない時期だろう。もっとも、中等部に進学するベアトリーチェはともかく、俺と同じ高等部の生徒となる、妹のカナコと、親戚で同居人であるタオエンは、そういったテンションとは無縁なようだが――

「――兄さんっ」

前言撤回だ。リビングに現れた妹はほんの少し、普段よりテンションが高い。理由は訊（き）かなくても判るし、どんな反応（リアクション）を期待しているかも察しがつく。生憎（あいにく）と俺は、鈍感なハーレム系ラブコメ主人公じゃない。

「おかえり」

とはいえ、まず第一声はこれだろう。挨拶（あいさつ）、大事。

「はい、ただいま帰りました」

失念していたとばかりに、帰宅したカナコは応じ、すぐに期待の眼差（まなざ）しを俺に向け直す。

出張から帰った親に、無言で土産（みやげ）を催促する子供のようだ。

カナコはタオエンとベアトリーチェと一緒に、注文していた制服を取りに行っていたのだが、試着してそのまま着て帰ったらしい。つまり、制服姿の感想が欲しいという事だろう。

「制服、似合ってるよ」

「本当ですか……!?」

望んでいたであろう言葉を実際にもらい、カナコの表情が華やぐ。やはり今日はテンションが少し高い。新しい服というのは、女の子にとってはこんなにも心躍るものなのか。

制服に合わせたのか、普段は下ろしている長い黒髪を白いリボンで結び、胸元に回しているのが新鮮だ。ちなみに、看板娘の衣装の一部であるネコミミは、今は外（はず）している。

「中等部はセーラーだったので、ブレザーになると高校生になったんだと実感します」

「なってみれば何も変わんないけどな。校舎が変わっても、同じ敷地内だし、設備もたいして変わらん」

「兄さんが言うなら、そうなんでしょうね。でも私、今、少しだけ浮かれています」

くすりと笑い、カナコが俺の隣に座る。ソファは無理をすれば、大人が三人は座れるサ

イズなのだが、妹は肩が触れ合う距離で俺に身を寄せた。
近いどころじゃない。
「あー……ベアトとタオエンは一緒じゃなかったのか？」
「兄さん、二人の制服姿も見たかったんですか？」
特に他意はなく、ただなんとなく選んだ話題だったのだが、失敗したらしい。カナコの瞳から光が消え、声の調子（トーン）が下がった――ような気がした。
「いや、そういう訳じゃなくて……」
「そうですよね。兄さんは私以外の女に興味なんて、あるはずないですよね」
『あるはずない』をかなり強調された。
妹よ……兄さん、ちょっとだけ怖い。
カナコ曰（いわ）く、ベアトリーチェとタオエンは制服を受け取った後、看板娘の仕事に向かったらしい。今日の担当は三姉妹で、カナコともう一人の看板娘・ツバキは休みだとも言われた。つまり、この時間は俺とカナコしか家にいない。
「兄さんはセーラーとブレザー、どちらがお好きですか？」
「特にどっちってのはないかな……」
事実だ。どちらも見ようと思えば普通に視界に入る。何なら家でだって両方を見られる。制服の良さが判るのは学生じゃなくなってからだと言われるが、それは制服が『日常』じゃなくなるからなのかもしれない。
「もうすぐ私、兄さんの後輩になるんですよね？」
二人きりの家のリビングで他愛のない会話をしていると、不意にカナコが言った。俺とカナコは二つ違いなので、同じ校舎や職場に通う者を先輩・後輩という分け方をするなら、間違ってはいない。
「学校ではどう呼べばいいですか？　『兄さん』？　それとも――『先輩』？」
「!?」
なぜだろう。胸が高鳴った。すぐ隣で肩を寄せ、密着している少女が、妹とは別の存在に変わった気がした。
「……兄さん、今、ドキッとしましたよね？」
「いや、まあ……うん」
カナコは心なしか、少し不機嫌というか、むっとした表情で俺を見ている。自分から振っておいて、何が気に入らなかったのだろうか。
「そうですか。じゃあ、もう『先輩』とは呼びません」
「え？」

「何かご不満ですか？」

「いや、別に……でも、何で？」

不満はない。ただ、理由が判らない。

『妹』より『後輩』の方が良いなんて、なんだか否定された気分だからです」

それに――と妹は続ける。

「後輩はたくさんいますが、兄さんの妹は私だけです。つまり、唯一無二の存在――」

それはつまり。

「兄さんを『兄さん』と呼べるのは私だけの特権なので、学校でも『兄さん』と呼びます」

自分が『妹』という特別な存在である確認と、それを周囲に認識させるために。

「いいですよね――兄さん？」

そう言うと妹は、ご機嫌斜めである事を主張するように、俺に無言で身体（からだ）を擦（す）り寄せた。

それこそ、所有物に自分の匂いをつけようとする猫のように。

Mission complete

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『そーりょくせんっ！』十二戦目をお届け致します。

間にロリ巨乳（ツバキ）を挟みましたが――挟むより挟まれたいですね――年明けに続きカナコのお話でした。別に贔屓（ひいき）とかじゃなく、キャラ紹介ページを制服姿で統一したかったからというだけで、カナコが特別好きとかじゃないんだからね⁉（無駄ツンデレ）

一応書いておくと、このシリーズは『サザエさん』方式です。四月になるとリセットされるので、彼等は歳を取りませんし、ずっと同じ一年間を繰り返します。

何度でも繰り返す――ほむほむみたいに！

そして因果が集束する事で新たな展開になったりなんかしちゃったり！

絶対にしません。

このシリーズは日常ラブコメです。

よきところで――ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。セーラーとブレザー、どちら派ですか？

正解は『どちらも良い』です。決めるべきじゃないし、そもそも優劣なんて存在しないんです。

神はこう仰（おっしゃ）いました――すべての美少女の下（もと）、制服は平等であると。それはメイドやゴスロリ、和服もナースも同様。すべてのコスは尊い……！

あ、ちなみに挿絵はカナコの機嫌を直すために散歩に出たという設定です。

２０１８／４／10　流遠亜沙

アンケートに答える
『そーりょくせんっ！』ページに戻る